

西宮市立郷土資料館ニュース 第36号

西宮市立郷土資料館 兵庫県西宮市川添町15番26号 〒662-0944
電話 0798-33-1298 web www.nishi.or.jp/homepage/kyodo/

第27回特別展示「西宮の講-つどいの民俗-」

細木ひとみ (当館嘱託)

はじめに

西宮市立郷土資料館では、平成23年7月17日(日)から8月31日(水)まで、第27回特別展示「西宮の講-つどいの民俗-」を開催する。講とは、宗教上の目的を達成するために、信仰を同じくするものが寄り合って結成している信仰団体のことをいい、さらには相互扶助の講へと変化したものもある。西宮市の旧村内にも、伊勢講や行者講、愛宕講などさまざまな講があった。しかし、講員が減ったり、講の持つ本来の意味がわからなくなったりして、解散してしまった講も多い。そこで、今回の展示では、特にトウヤ(当番)の家で行われていた講を中心に紹介する。

1. 「西宮の講」について

西宮市立郷土資料館では、これまでも西宮市内の講の調査を行い、さまざまな活用をしてきた。

『研究報告』第三集⁽¹⁾には、池田直子氏の「資料紹介『森具盛徳講』文書」と土居佳代氏の「森具盛徳講にかんする聞き取り調査」を掲載している。盛徳講は、森具地区(屋敷町、郷免町周辺)にあった伊勢講である。

また、下大市にあった加茂組心願講は京都府長岡京市にある柳谷観音(楊谷寺)を祀る講で、これについては井阪康二氏が『西宮市立郷土資料館ニュース』第5号⁽²⁾に「大正3年のワリコと心願講・長生講」、『研究報告』第四集⁽³⁾に「摂津加茂組心願講」と題して報告している。どちらの講も現在では解散しており、寄贈していただいた講道具や聞き取り調査の内容は貴重な資料となっている。

これらの調査成果を元に、郷土資料館では平成15年(2003)1月7日から3月23日まで第23回特集展示「西宮の講」を開催した。この展示では、郷土資料館が所蔵している講道具を展示し、『西宮の年中行事』や『下大市の民俗』、『甲東の文化財を訪ねて-石造物を中心に-』、『下大市今昔物語』など西宮市内の報告書

から講に関する記述なども紹介した(4)。

さらに、第22回特別展示「西宮の漁師-漁具と伝承-」で、鳴尾町にあったえびす講の講箱と帳面、鍵を展示し、展示案内図録(5)にも紹介した。

第27回特別展示では、今までの調査成果とともに、さらなる調査で知り得た講を加えて展示する。どのような講がどのような地域にあったのかを知ることで、各地域の社会的なつながりが明らかになってくるからである。

2. 現在も行われている講

西宮市山口町下山口で調査中に、現在でも講がたかかれていることを教えてもらった(山口町では講を行うことを「たく」と言う)。そこで、下山口以外にも講が行われているのではないかと思い、西宮市内の旧村を中心に講の再調査を始めることにした。以下に、現在も行われていることがわかった講で、話が伺えたもののみを紹介する。

(1) 山口町下山口

下山口の伊勢講は、上之講、中之講、下之講、歳参り講と4つのグループがあり、上之講と中之講は2月11日に公智神社の社務所会館で、下之講は同日に下山口会館で講をたいている(写真1)。年詣り講は、お伊勢さん(三重県の伊勢神宮)に詣るためだけの講で、約18軒で構成されている。

下山口にはこの他にも、公智神社の境内末社である恵比須社の戎講、公智神社と丸山稲荷神社それぞれにある百味講、銭塚地蔵尊の地蔵講(写真2)、長野県長野市の善光寺を祀る善光寺講(写真3)が現在でも講をたいている(6)。

(2) 山口町名来

山口町名来には、伊勢講と新伊勢講がある。伊勢講は現在休講中であるが、新伊勢講は4月を花見講、12月を終い講として、年2回講をたいている。

また、正明寺の境内で祀られている地蔵尊の地蔵講がある(7)。8月24日と12月24日に地蔵盆をしていたが、3年ほど前から



写真1 下山口の伊勢講(下之講)



写真2 下山口の地蔵講



写真3 下山口の善光寺講

8月24日だけに変更したという。8月23日の夕方から地藏堂の前でご詠歌をあげ、24日の13時ごろから正明寺の本堂で数珠繰りを行う。

(3) 門戸岡田町

門戸岡田町には、伊勢講(1月11日)と愛宕講(2月24日)、大師講(3月21日)がある。3つの講とも10軒で、昔からの農家であるという。講を行うときには、それぞれの講の掛け軸をかける。各講の当番は1年交代で順番にまわる。

門戸には伊勢講が3組あったが、うち1組は休んでいて、もう1組は5軒くらいで構成されているという。

(4) 上ヶ原

上ヶ原には、行者講と稲荷講がある。行者講は、3月の初めでみんなが集まれる日に、上ヶ原八幡神社境内にある行者堂の前で大護摩を焚く(写真4)。また、7月には大峯山に参りに行く。昔は1ヶ月に1回、現在は講員数が減ったので2ヶ月に1回(1月、3月、7月は行わない。1月は神光寺で初不動火渡り大護摩が行われるためである)、講員の家を順番に回り、お参りをする(写真5)。この時、昔は役行者像を祀っていたが、役行者像が壊れたので、不動明王と役の行者と般若心経の3幅の掛け軸を掛けて祀っている。

稲荷講については、上ヶ原八幡神社境内にある祠と上ヶ原七番町にある社を祀る講がそれぞれにあると教えていただいた。



写真4 上ヶ原行者講(大護摩)

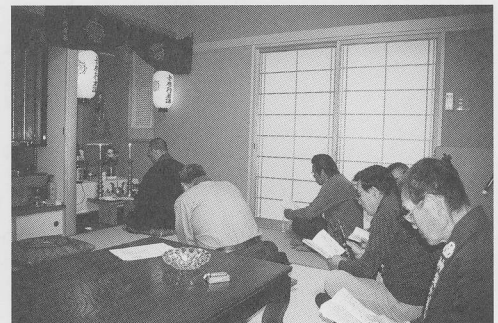


写真5 当番の家でお参り

(5) 下大市

下大市には、伊勢講、愛宕講、行者講、観音講、長生講(妙見講)などさまざまな講があったが、現在は、お日待講(1月14日)と大師講(1月21日)、浄土真宗の檀家で行う報恩講が残るのみである(8)。大師講は4組あり、それぞれの組の講員は同行(ドウギョウ)と呼ばれ、講員に不幸があると葬式の手伝いに行くという。かつては、3月21日に行われていたが、1月21日に変更された。また、永福寺に参ってから、それぞれの組のトウヤの家で講を行っていたが、現在は4組とも永福寺で講を行なっている。

(6) 津門稲荷町

津門稲荷町には伊勢講と愛宕講と官頭講がある(9)。伊勢講は現在8軒で、毎年2月11日にたく。津門にはいくつか伊勢講があったが、今は1つだけ残っているという(傳右衛門講)。愛宕講は現在6軒で、毎年2月24日に行なう。官頭講(かんどこう)には直系(本家)の長男だけが入れる。60軒ほどが入っている。毎年、彼岸の中日(3月21日)に昌林寺に集まって行なう。

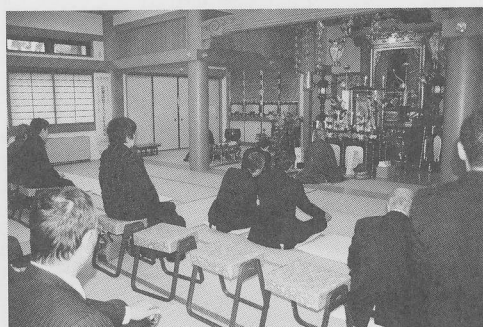


写真6 津門稲荷町の官頭講

おわりに

展示を通して、西宮市に講という「つどう」民俗があることを知ってもらいたいと思い、「西宮の講-つどいの民俗-」と題した第27回特別展示を企画した。しかし、講員でなければ講の存在を知ることができないため、まだまだ調査ができていない地区もある。今後も続けて調査をしていきたい。

<附記>

今回の展示は、各講のみなさまのご協力により、開催することができます。ここに記して、感謝の意を表したいと思います。そして、多くの皆さまにご来館いただき、第27回特別展示を観覧していただきたいと思います。

<註>

- (1) 『研究報告』第三集、西宮市立郷土資料館、1996年3月刊。
- (2) 『西宮市立郷土資料館ニュース』第5号、西宮市立郷土資料館、1989年7月刊。
- (3) 『研究報告』第四集、西宮市立郷土資料館、1998年3月刊。
- (4) 西宮市文化財調査報告書第3集『西宮の年中行事』、西宮市教育委員会、昭和53年11月刊。
文化財資料第25号『下大市の民俗』、西宮市教育委員会、昭和57年11月刊。
『甲東の文化財を訪ねて-石造物を中心に-』、甲東文化財保存会、昭和59年3月刊。
松岡孝彰編著『下大市今昔物語』、下大市自治連絡協議会、昭和38年3月刊。
- (5) 第22回特別展示「西宮の漁師-漁具と伝承-」展示案内図録、西宮市立郷土資料館、平成19年3月刊。
- (6) 『山口町史』(財団法人山口町徳風会、平成22年7月刊)の「講社」に、下山口の伊勢講と銭塚地蔵の地蔵講が紹介されている。また、下山口の百味講については、『西宮市立郷土資料館ニュース』第35号(西宮市立郷土資料館、平成23年2月刊)に「西宮市山口町下山口の百味講」と題して紹介した。
- (7) 『山口町史』の「如雲山 正明寺」の項に地蔵講が紹介されている。
- (8) 下大市の講については、『下大市の民俗』や『下大市今昔物語』に詳しい。
- (9) 『津門之今昔』(津門区有財産管理委員会、昭和46年11月刊)に詳しい。

武庫郡・菟原郡の郡境について—阿弥陀寺の鐘と双盤—

俵谷和子（当館学芸員）

はじめに

西宮市域南部は明治時代半ばまでは武庫郡、北部は有馬郡と呼ばれる行政区画に属していました。今回取り上げるのは、武庫郡とその西側にある菟原郡(芦屋・神戸市域)との郡境の問題です。この問題に一石を投じる資料が、郷免町の阿弥陀寺に伝わっています。什物である半鐘と双盤です。両者はいずれも江戸時代に製作された銅製品であり、刻まれた銘によると阿弥陀寺が武庫郡に所属していた時期と菟原郡に所属していた時期があったことがわかるのです。そこで、この資料とおして、武庫郡・菟原郡の郡境の問題について整理したいと思います。

なお、半鐘と双盤の所在情報は、今津在住の市民から得たもので⁽¹⁾、確認調査は平成23年5月17日に実施しました。

1. 阿弥陀寺と森具の概要

まず、半鐘と双盤を所有する阿弥陀寺とその所在地について紹介します。

来迎山引接院阿弥陀寺は、浄土宗知恩院末で、元和年間(1615～1624)安立和尚の開基だと伝わっています。『武庫郡誌』⁽²⁾によれば、「当寺開基後、水災に罹り(年代不詳)、堂宇並に小記録・古器物共に流失の厄に遭ひしが、貞享3年(1685)当寺第七世円保和尚更に之を中興せり」とあって、開基して60年後に第7世円保によって再興されていることがわかります。

『西宮市史』第七巻の「明治十二年調べ寺院明細帳」⁽³⁾によれば、阿弥陀寺の所在地は「武庫郡森具村字屋敷」とあります。森具は、明治7年まで「守具」と表記されていました。守具の由来は、「夙(しゆく)」もしくは「宿(しゆく)」の音が「しゅぐ」となり「守具」となったと言われています。『大社村誌』⁽⁴⁾には、垂仁天皇のころ(紀元前25年)皇后である日葉酢媛命が亡くなったとき、野見宿禰の奏上で土偶で殉死の臣に代えることになりました。殉死を免れた臣たちは都を逃れ各地に隠れ住んだといわれ、そのため森具も「殉臣村」と言われていたようです。そして、時代が下り元の意味が分からなくなって「夙」になった、あるいは「宿」の字は野見宿禰の「宿」に由来すると紹介しています。

『日本紀略』天慶2年(939)12月26日条⁽⁵⁾の備前介藤原子高らとの合戦の場(藤原純友の乱)である摂津国須岐(すき)駅がこの付近だったとも言われています。

2. 半鐘と双盤の銘文

つぎに今回の問題となる半鐘と双盤について紹介します。半鐘は、阿弥陀寺本

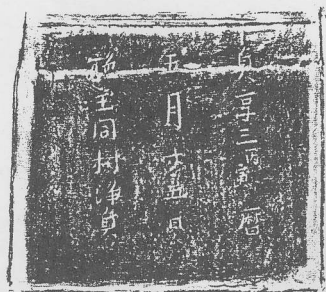
堂の廊下にかかっています。青銅製、完全で総高47.5センチ、下端の径30センチ、池の間三区にわたり計44字が陰刻されています。銘文は次のとおりです(図の縮尺は1/4)。

第一区「摂州菟原郡夙村／阿弥陀寺什物／融誉円保代」(第1図)、第二区「貞享三丙寅曆／五月廿五日／施主同村浄貞」(第2図)、第三区「室町住出羽大掾守味作」(第3図)。銘文から貞享3年(1686)5月25日に製作された半鐘であること、施主は夙村の浄貞で、鑄造は室町(京都)に住む出羽大掾守味の作であることがわかります。

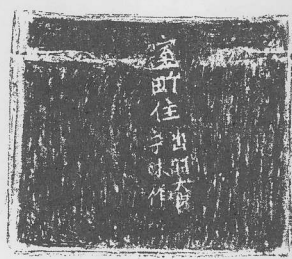
双盤は、寺院で法会に打ち鳴らす金属製の盤で、本来一对で使われるもののようですが、阿弥陀寺には一つだけ伝わっています。総高59センチ、幅59センチ、銅製部分は径36センチです。縁の銘文は、「摂州武庫郡西宮同阿弥陀字常什物 正徳癸巳三年七月六日成誉代 為繁誉栄生女菩提 寄進之施主當村忠兵衛」(第4図)とあり、正徳3年(1713)7月6日に、忠兵衛が繁誉栄生女菩提のために寄進したことがわかります。



(第1図) 阿弥陀寺半鐘拓影 第一区



(第2図) 阿弥陀寺半鐘拓影 第二区



(第3図) 阿弥陀寺半鐘拓影 第三区

3. 武庫・菟原の郡境論争

武庫郡と菟原郡の境界について、『西宮市史』第一巻では、「後代の郡界である夙川よりも約七〇〇メートルほど東であった」(6)として、「延喜式」に菟原郡に属する大国主西神社が現在の西宮神社を指していること、社地の移動もなかったため、後世武庫郡内となった社地は、もとは菟原郡に属していたことを紹介しています。あわせて、夙川が西宮神社より東を流れていた可能性にも触れています。

そして、西宮市常磐町にある武庫郡と菟原郡との郡界伝承地を写真入で紹介しています。ここには、「一本松」があり、「史蹟往古武庫菟原郡界傳説地」と「一本松地藏尊」と刻まれた石造物が建っています。大正15年8月の年号があつて地元の青年団によって建立されたことがわかります。ちなみに「一本松地藏尊」と刻まれた花崗岩製の石造物は、刻印石(江戸時代大坂城が再建されるときに石垣用石材)です。

しかし、この説に反対する意見も多数あり、現在なお郡境の問題は決着してい

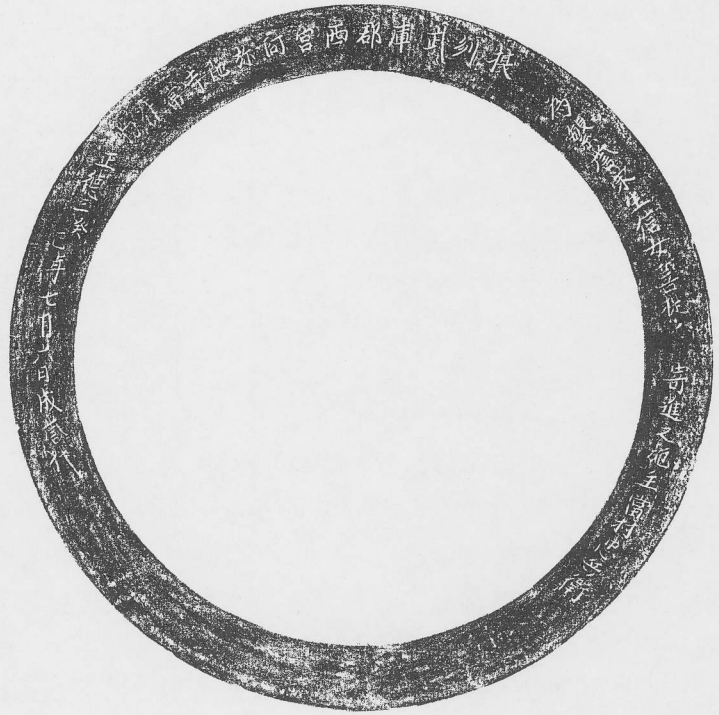
ません。

4. 江戸時代の絵図から見る郡界

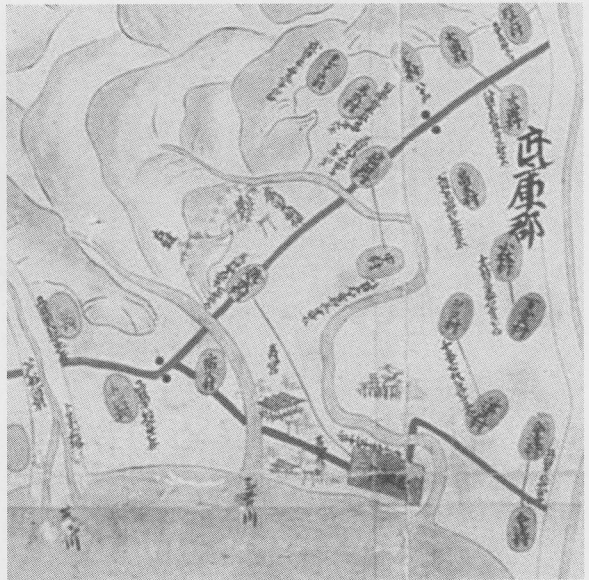
当館の収蔵資料に「慶長十年(1606)摂津国絵図」(県指定文化財)があります。この絵図をみると郡界の線引きはありませんが、村名を記入してある小判型の枠内が郡ごとに色分けされていて、「宿久村」が武庫郡に属していたことがわかります。場所は、夙川の西側に位置しています(第5図)。正保2年(1645)頃

に作成された竹田市立図書館蔵「正保国絵図」には、「西ノ宮内夙」とあり、京都府立総合資料館蔵「正保国絵図」には、「夙西宮ノ内」と村名が記され、夙川に境界線が引かれています。元禄15年(1702)の「元禄国絵図」にも、打出村から西宮町まで村名は記されていませんが、夙川と堀切川の間境界線が引かれています。天保9年(1838)に作成された「天保国絵図」には、「西ノ宮町之内守具村」とあって、夙川の西を流れる堀切川の西に境界線が引かれています。そのことをまとめると郡界変遷表(表1)を作ることができます。

これによると、慶長では武庫郡であった夙村が貞享3年では菟原郡になり、正保には再び武庫郡に属していたことがわかります。『酒都遊観記』(7)によれば、慶長17年に本堂が再建され、正徳3年にも再建されたことが紹介されています。鐘が



(第4図) 阿弥陀寺双盤拓影 (採拓：森下真企)



(第5図) 慶長十年摂津国絵図(武庫郡部分)

鑄造された貞享3年も7世円保によって再興された年です。

おわりに

江戸時代における郡界については、阿弥陀寺の什物や絵図類によってある程度変遷を追うことができました。しかし、古代・中世の郡境については未だ明らかにはなっていません。それは、郡界となる夙川の流れが現在と一致するのか、『延喜式』の大国主西神社が現在の西宮神社と一致するのかなど解決されていない問題が含まれているからです。江戸時代の変遷についても同様で、阿弥陀寺が現在地から移転がなかった、銘文に間違いがなかった、という点については明らかにすることはできません。まだまだ、この問題は決着しないようです。

今回紹介した阿弥陀寺の什物による郡界の問題については、昭和49年に刊行された『酒都遊観記』に報告されています。しかし、今までこのことはあまり議論されてきませんでした。阿弥陀寺は、阪神淡路大震災で大きな被害を受けており、多くの文化財が失われました。そのなかで、これら銅製品が無事であったことは大変幸運なことです。数少ない歴史遺産を次代へと伝えていきたいものです。

今回紹介した阿弥陀寺の什物による郡界の問題については、昭和49年に刊行された『酒都遊観記』に報告されています。しかし、今までこのことはあまり議論されてきませんでした。阿弥陀寺は、阪神淡路大震災で大きな被害を受けており、多くの文化財が失われました。そのなかで、これら銅製品が無事であったことは大変幸運なことです。数少ない歴史遺産を次代へと伝えていきたいものです。

<註>

- (1) 今津いまむかし物語 (http://nishinomiya-style.com/blog/page.asp?idx=10001375&post_idx_sel=10032587) を運営。
- (2) 『武庫郡誌』復刻版 中央印刷株式会社出版部 1973年
- (3) 『西宮市史』第七巻 西宮市 1967年
- (4) 『大社村誌』大社村誌編纂委員会 1936年
- (5) 『日本紀略』(『新訂増補国史大系』第十一巻)
- (6) 『西宮市史』第一巻 西宮市 1959年
- (7) 飯田寿作・浅田柳一『酒都遊観記—酒都歳時記—』酒都遊観記刊行委員会 1974年

目次 CONTENTS

第27回特別展示「西宮の講—つどいの民俗—」(細木 ひとみ) …1

武庫郡・菟原郡の郡境について—阿弥陀寺の鐘と双盤—(俵谷 和子) …5

西宮市立郷土資料館ニュース第36号 2011年6月30日

年号	記載内容	出典
慶長10 (1606)	(武庫郡)宿火村	慶長国絵図
正保2 (1645)	(菟原郡)西ノ宮内夙	正保国絵図(竹田本)
正保2 (1645)	(菟原郡)夙西ノ宮 夙川の右岸に境界線あり	正保国絵図(京都本)
貞享3 (1686)	菟原郡夙村阿弥陀寺	阿弥陀寺半鐘
元禄15 (1702)	(村名なし) 夙川と堀切川の間に境界線あり	元禄国絵図
正徳3 (1713)	武庫郡西宮阿弥陀寺	阿弥陀寺双盤
天保9 (1838)	(武庫郡)西ノ宮町之内守具村 堀切川の西に境界線あり	天保国絵図

表1 江戸時代の郡界変遷表